

特集「主権と空間」

シンポジウム「沖縄に折り畳まれた複数の空間性 いま、なぜ、どのように沖縄現代史を書くか——櫻澤誠『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中公新書 2015年）をめぐって——」

はじめに

高橋秀寿

立命館大学国際言語文化研究所「主権と空間」研究会は2016年2月27日にシンポジウム「沖縄に折り畳まれた複数の空間性 いま、なぜ、どのように沖縄現代史を書くか」を沖縄大学地域研究所の後援を受けて沖縄大学3号館101教室にて開催した。そこでは「主権と空間」研究会代表の高橋秀寿（立命館大学——所属は当時、以下同様）が主旨説明を行ったのちに、謝花直美氏（沖縄タイムス編集委員）、松田ヒロ子氏（神戸女学院）、大野光明氏（大阪大学）が報告を行い、これに櫻澤誠氏（立命館大学）が応答した。司会を高橋秀寿がつとめ、フロアとの間でも有益な議論が展開された。

このシンポジウムに向けてあらかじめ提示した主旨は以下の通りである。

立命館大学国際言語文化研究所のプロジェクト研究会「主権と空間」は、現代社会が直面する問題を理解するカギとなる概念として、グローバル・ナショナル・リージョナルな空間の関係の変容を取り上げ、その分析に取り組んできました。今年度も日韓の領土問題、日本とドイツの極右における空間問題、スコットランド独立問題におけるEUと国民国家と地域の関係に関してこの研究会で議論を行い、1月末には現代イスラーム地域研究者による報告を通して「内戦・難民・テロから考える領域国民国家体制の限界」の問題を考えることになっています。沖縄は、グローバル・ナショナル・リージョナルな空間の錯綜とその矛盾が日本において最も先鋭化された形で表れている地域であることはいままでもないでしょう。沖縄には複数の空間性が折り畳まれ、そのローカルな空間には、ナショナルな眼差し、そしてグローバルな軍事主義の力が差し向けられ、沖縄がその空間に翻弄されながら、その空間に対して自らの地域性を保持・主張しているからです。

近年、沖縄現代史に関する著作が続々と出版されていますが、どの作品も丁寧に歴史を実証し叙述しているだけでなく、辺野古での新基地建設問題など現在進行形の政治との緊張関係を内包したものとなっています。「主権と空間」研究会の問題関心に沿って言うならば、沖縄現代史を書くということは、ローカルにしてナショナル、グローバルな磁場を裏書きしながらなされているといえるでしょう。

沖縄をめぐる政治状況が日々、悪化するなかで、いま、なぜ、そして、どのように沖縄現代史は書かれているのでしょうか。沖縄現代史を書くという行為は、どのような今日的意味を持ちうるのでしょうか。このシンポジウムでは、「主権と空間」研究会のメンバーである櫻澤誠氏の近著『沖縄現代史』（中公新書、2015年）を一つの対象として、これらの問いをめぐって討議の場を開き、沖縄現代史の空間的広がりや複層性をあらためて考察してみたいと思います。

以下の論文は、シンポジウムのパネラーが、シンポジウムで行われた報告にもとづき、そこで展開された議論を加味しながら執筆されたシンポジウムの記録である。最後になってしまったが、このシンポジウムの開催にあたって多大なご協力をいただいた沖縄大学名誉教授の新崎盛暉氏と同大学地域研究所副所長の若林千代氏に、さらにこのシンポジウムに参加いただいた多くの沖縄の方々に、この場を借りて感謝申し上げたい。